

きょうかん賞

「夢を手にして」

大畑 楽歩さん（京都市上京区）

私は小さい頃から「お母さん」になれることを、ずーっと夢見続けてきた。

私にとってそれは果てしなく大きな夢だった。

「えっ？お母さんになることが？」と思われるかもしれないが、脳性麻痺というハンディを背負っている私にとっては、オリンピックで金メダルをとりたいねん！と言ってスイミングを習いはじめる無邪気な子どもの言うことと変わらないぐらい、いや、もしかしたら、その子が将来オリンピックという大舞台で金メダルを取る可能性の方が勝るかもしれない程に、私が母になりたいという夢は、遠く儂いものだった。

夢が夢で終わるか否かは、神の力でもなく、夢の大きさによるものでも、努力の差違でもないと思っております。ただただ、どれだけ深く大事にその夢を持ち続けられるかどうかにあるのだと。もちろんかなえる為に惜しみない努力や、時には運（神の力）も大きく左右されるのですが、「夢」をいつも大切に自分の傍らに置いておくことで、自然と努力もできるでしょうし、チャンスも逃さずキャッチできるアンテナを立てておくことができるのではないのでしょうか？

私はアテトーゼ型の脳性麻痺者ですが、家の中での身の回りのことは、ゆっくりと時間をかければ大抵のことは自力でできます。また家の中では車椅子や装具を使わずに歩くこともできます。ただ、公共機関を使って一人で出かけることや、歩いてどこかへ行くことは、無理なことですし、介助者と一緒であっても、車椅子というアイテム無しでは難しいでしょう。それ故、社会人として働くことは、もっと沢山のハードルがあり、父の勤める会社で事務のアルバイトとして雇ってもらっていましたが、親が死んだら、私はどうやって生きていけばいいのだろうという不安を常に抱えていました。そういう意味合いにおいて自立出来ていなかった私が、今こうして人並みの家庭を持っていられて、母でいられる幸せを“奇跡”という言葉で語るしかなくなってしまうからです。確かに“奇跡”なのかもしれません。でも、周りから、ときに親にまでも「あなたに結婚は無理だって」って言われ続けても、私は自分の夢を捨てきれず、大切にいつもそばに置いて「私にだってできるはず！チャンスは必ず訪れる！」と思いつけていたからこそ、今の幸せがあるのだと私は信じているのです。

息子が生まれてからはや7年。私の母暦も8年目を迎えました。

息子は今1年生で、新町小学校に通っています。家から学校まで約10分の距離で、8時20分に出たら悠々、間に合う近さだというのに、学校が、お友だちと

遊ぶのが大好きな息子は、7時40分には家を出て行ってしまいます。放課後は学校で残り遊びを楽しむか、4～5人のお友だちを招いて家で遊ぶかのどちらかです。

息子が通う新町小学校は、公立小学校だというのにバリアフリーが行き届いています。玄関にスロープがあるのはもちろんのこと、身障者トイレは各階に、そして館内にはエレベーターまで完備されているので、息子の参観日はもちろん、レクリエーションなど様々な行事にも躊躇せずに、電動車椅子で行くことができます。なので、息子のクラスメイトの子は、私のしゃべり方が聞き取りにくくても、家に遊びに来た時に、初めて私の歩く姿を目にしても然程、驚くことなく接してくれるのが私にとって、とても嬉しいことです。ゲームもそっちのけで、じーっと私の動きを観察する子、全く他の「お母さん」と変わらず普通に接してくれる子、「なんで、そんなに声で一へんの？首でも痛いん？」と単刀直入に聞いてくる子、私がしゃべる言葉をちゃんと聞きとらなきゃ！と神経を集中させて緊張の面持ちで耳を傾けてくれる子、と子どもによって実に様々ですが、どの子も皆、私のことを馬鹿にしたり、気持ちわるがったりせず、「大畑くんのお母さん」として親しみを持って接してくれるのが驚きであり、なんとも言葉では言い難い満たされた気持ちにしてくれるのです。

社会貢献というところから程遠い場所で生きてきた私でしたが、こうして息子を通して他の子ども達とも関わることが、近頃の私の楽しみであり、放課後にベストコンディションで子ども達を迎えることができるように、体調を整えながら、主婦業にも励み、二次障害なんかに負けない体力づくりもあせらず、怠らず、日々、精一杯、今日もまた家族と共に明日へとつなげていきたい。